関西旅行雑感

――あれこれ美術論――

矢田　清
（本会顧問・大阪）

まえがき

大阪の矢田先生より、去る十月末の関西旅行の御感想を、四回にわたり（十月三十一日、十一月三日七日、十二日）羽柴先生への私信で、いろいろ述べられていられるのを編集子が、旅行関係の分だけ抜き出してまとめたものです。従って題も編者がつけたものです。

博学な先生の文ですから、浅学な編集子には手がつけられない箇所もありますので、それはそのまゝに致しました。四通の手紙をあれこれとつなぎましたので、文章のおかしい所もありますが、それは編者の責任です。

私達が何気なく見過ごしてきたものに、先生の鋭い見識が述べられていて、大変参考になります。是非御一読下さい。（塩月）

明日香

この度の関西旅行に参加して、予想以上の収穫に驚いています。中でも最も感銘したのは、明日香村の高松塚古墳と、異様とも言うべき上古の人面彫刻です。次に予想外に巨大な橘寺の塔婆礎石に、この上に建てられた塔婆の高さいくばくなりしかと、古人の構想の壮大さに驚嘆しました。

明日香の丘陵の起伏重畳たる土地のこれらの遺跡を見るにつけ、この時代の住民は何を着、何を食し、如何なる家屋に居住して、その用語は何国語なりやなど、千四百年の遠い先祖の生活を偲ぶことしばしばでした。

明日香の丘陵重なる山また山の土地を見た渡来人が、

日本のことを山人（やまと）の国、又人間が小さいので倭人（こびと）の国と言ったらしく、鷲鼻の二面石（橘寺）などは、多分渡来人の作製でありましょう。高松塚と橘寺には、早い時期に再訪したいと思います。

高松塚古墳

高松塚古墳も同時代の飛鳥文化の流れとみてよく、ただ驚くのは使用彩料即ち絵具の変色の少ない事です。千年余も多湿の土中に埋もれば、変色は当然の事ですが、どこの鉱山からこの絵具を採取したものか、当今の彩料でも及ばない精選無比の粉末絵具を、何で定着させたものか。膠は湿気に弱いので、或は古書にあるように桃の枝のねばりを使用したものかも知れません。相手が岩石故膠ではすぐ落ちてしまいます。

朱雀即ち南側の蓋石がないのを見れば、一度は盗掘にあったこともあるのでしょう。佩刀の刀身がありません。

埋葬の副葬品の中にある黄色コバルト色の二、三ミリのガラス玉は、正しく言えば玻璃（はり）玉です。真正の天然玉は瑠璃（るり）玉と言います。玻璃玉の方は不透明故すぐ分りますが、本邦にはできないので当時としては最大の貴重品でしょう。粟玉は粟粒ほどのビーズ玉で、黄色に輝きます。

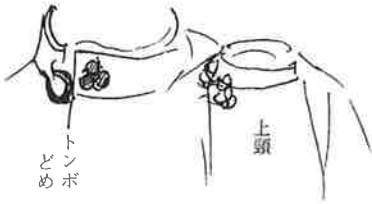
壁画は宗教臭のない完全な絵画です。そこで愚生の考えでは、壁画中最も鮮明で、よく色刷りになっている三人の侍女中、中央の美女の持つ如意らしきものは如意ではなく、今のホッケーに類する打球戯の打ち棒です。元来壁画なるものは、死者の霊をとむらうよりも、暗い地下にあっても、地上と同じ生活ができるようにとの心から、日常身辺の生活から遊戯具に至るまで残らず描いたものです。又年代から考えても、未だ異国の邪教である仏教は、弘法大師在世中の弘仁期でも危なかったのですから、ましてや飛鳥においておやです。如意ならば当然僧侶が奉持すべきところです。また如意にしては柄が長すぎます。

故人の服装の具体的な資料と言えば、法隆寺夢殿の天寿国曼陀羅繡帳が唯一のよりどころです。この曼陀羅は

飛鳥朝の製作ですが、さほど古びてもおりません。当初は多分仏龕のとばり用だったらしく、用いた色糸の染色甚だ鮮明で、またその色糸も太糸で、ちょうど当今のフランス刺繍そっくりの感があり、白く光っているのは金糸で輪郭をとったものです。腰帯の位置は低く、高松塚壁画と全く同じ風俗です。

その説明文中の襈とは、支那服によく見られる衿や袖口の黒縁のことです。但し若年は青、中年は黒、老年は白です。本邦では是を附す事なく終りましたから、どの時代の風俗画にも描かれた例はありません。ですから天寿国曼陀羅も、高松塚壁画も製作者は渡来人かも知れませんが、製作は本邦に於いて、高位者の指導により、本邦では用いない襈を除いて描いたものと思います。

次に着衣の衿ですが、形に上頸と垂頸の二種があり、上頸は今の神官の着ている詰衿式のを言い（天寿国曼陀羅では四人とも上頸）、垂頸は現代の着物と同じく、左右の衿をかき合わせにする方式のもので、垂頸でありながら詰衿式にしか用いぬトンボ（トンボの目玉に似ているのでトンボ玉という）と、紐結びの二種の止め方が見られると言うのも、日本人の風俗を見てからの事でしょう。女性の裳は養老の衣服令によれば、紫、蘇芳（五月頃淡紫色の花をつける潅木）緑の纈（纈は天平語で今の絞りを絞纈、板に模様を彫って二枚の板に挟んで染めるのを挟纈、蝋染を蝋纈と呼ぶ）とされています。左前を右前に直すように決められたのは養老三年ですから、おそらくそれ以前の姿なのでしょうか。



中国で左前を右前に強要したのは、秦の始皇帝が隣国を征して多くの奴隷を連れ帰り、そこで自国人は右前、奴隷は左前ときめましたが、実際にはなかなか行われず、日本もこの制を施行したのですが、右前、左前まちまちであったらしく、それ故是で時代は決められません。

私は絵具の鮮明度から見て、天平末まで下ると思います。絵具の剥落が少いことについては前述の通りです。

結髪は最新式のもので、上代では頭の上に二つまげをあげます。これが角のように見えるので双角、総角と書

いてあげ巻髪の一点張りです。こうなると結髪は朝鮮式かも知れません。

男性の服装を見ますと、上着の形はペルシャの袍に似ており、袖に横裂の襴がついています。有襴は高位、無襴は下位の者です。冠は漆沙冠で（沙を張って黒漆を塗る冠）、着物の色は緑或は縹です。

この時代の高位の人は紫か緋で、緑や縹は下位です。紫は紫根草、緋は茜草の根から染めるので高くつき、緑は刈萱の根からの黄色と、藍玉からの青色を合わせて染め、縹は露草の花の青から染めるので安く染め上ります。つまり色そのものではなく、染色代の高下によってきまったものです。露草の花を田一面に植えるので花田の称が生じました。票は遠しの意があり空の遠きは青しとなります。

愚生の考えでは、この壁画は全く当時のものではなく、飛鳥朝以後各種の手本を参考として作られたものと思います。石室の岩面を平に磨き上げるだけでも五年はかかり、更にその上に壁画を描くとなると、どうしても十年仕事だと思われます。遠い中国人ではなく、近くの朝鮮絵師の作らしく、人物の顔があごが張った朝鮮系人種であることからも考えられます。

絵の具の群青や緑青は日本の鉱山にもあり、宇目町の木浦鉱山は、昔から絵の具を産することで有名です。

吉野山

如意輪堂の正行辞世の歌の扉は偽物で、某史家の言に「この板の扉に矢尻位で、帰らじとの歌と郎党一同の姓氏は彫れず、多分後世の偽作でしょう」とあり、事実本物の彫刻刀を以ってしても、多年の修錬がなければ、杢目に刀があたれば刀がそれて彫り損じに終るものです。また如意輪堂の扉としては小さすぎます。（巾三尺、高さ四尺五寸位）表面に塗った弁柄塗料も一回だけで粗末ですし、六百年の風雪の跡もなしと見ました。まあ精々徳川中期以後の偽作でしょう。扉の様式は上端に桟のある近世の唐様扉で、まだ台鉋の渡来せぬ以前の槍鉋、木賊磨きの南北朝様式の面影はありません。台鉋は室町以降のものです。

蔵王堂は東大寺大仏殿につぐ木造建築物とあり、正面の巨大な丸柱の一本はツツジの木と聞いてびっくりしま

した。然しツツジは潅木ですからこれも眉唾物（まゆつばもの）と思われます。

高　野　山

私には八度目の高野山ですが、始めて見る物が多かった。

金剛峯寺は個人にはあの奥殿までは見せず、これも大きな収穫の一つでした。秀次自刃の間などは写真で見たより狭く粗末に思いましたが、これこそ寺伝によらぬ史実通りの小部屋造りのひとまで、従来は大客殿に続きこの小部屋のある例を見ず、まるで秀次自害の間として建てたように思われました。

高野山の霊宝館は時間の都合で見落しましたが、実を言うと見られるものは、「聖衆来迎」の模写大幅掛図だけです。仏像にも器物調度品にも、これと感心するものは一点もありません。霊宝館自体も小学校の一教室位の狭小な建物で多くは陳列できません。

元来密教は顕教と違って、御祈祷が主で、釈迦や観音、菩薩、天部などを尊ばぬせいでしょう。聖衆来迎図とても、あれは他力の真宗派が用いるもので、密教には用がなく、この図がどうして高野山に残っているのか不審でならないのです。絵として最も有名なものは「高野の赤不動」ですが、これは国宝で陳列していません。しかしこれとても純正美術眼より見ますと、線書や着色から見て、どうしても鎌倉以降の作であって、平安までは上らぬと某研究家も公言しています。私も国宝美術展で本物を一見いたしましたが、火焔の朱色が生々しく下品で、三不動と言われるものでは三井寺円満院の黄不動が第一で、次が京都青蓮院の青不動、第三位が高野の赤不動でしょう。不動は太陽の化身です。

新築の大塔もけばけばしいだけで感心できません。

薬　師　寺

最後になりましたが、初日に観た薬師寺の西塔も亦同様です。旧来の東塔と比較して、少々初層の軒反（のきぞり）がきつく、元来往古に於いては、当今の様に大工頭が寸法を割り出さずに、出たとこ勝負で次々に寸法を変更したからうまく行きましたが、このやり方は大変難しいので、当今は柱は何尺巾、軒先の出は何寸勾配と寸法に決まりができたので、出来上りが面白からずとあります。

この塔が三層建か六層建かは、正しくは三重塔ですが、水に映じてゆれた感じを出すために裳階（もこし）を付して六重に見せかけたという事ですから、三でも六でもいいわけです。

（終）